

かながわ 発

ぶれない本物の伝統

日本人の生活様式をがらりと変えたテーブルやイスなどの西洋家具。1859年の横浜開港後、横浜・元町周辺に移り住んだ外国人が持ち込んだ家具の修理や模倣からその歴史は始まった。150年余り続く、「横浜洋家具」の伝統を受け継ぎ、復興と発展に取り組み人々を訪ねた。

(黒岩竹志)

国内外の有名ブランド店が立ち並ぶ横浜・元町商店街を歩くと、途中で巨大な赤いイスが目飛び込んでくる。横浜洋家具を製造・販売する「ダニエル」の入り口に置かれている。子供を座らせて記念撮影する人も多く、観光名所になっている。

英国発祥の「ウィンザーチェア」というタイプで、「イスの原型」とも呼ばれる。毎年塗装し直しているため、古さは感じさせないが、製造からすでに50年以上が経過。社長の高橋保一さん(72)は「イスはうちのシンボル。手間暇かけた本物の家具は、何十年でも使えます」と胸を張

横浜洋家具 ①

高橋さんは大学卒業後、3年ほどの会社勤めを経て、ダニエルの前身で、親類が経営していた「湘南木工」に入社。当時の元町には横浜洋家具を扱った。高橋さんは大学卒業後、3年ほどの会社勤めを経て、ダニエルの前身で、親類が経営していた「湘南木工」に入社。当時の元町には横浜洋家具を扱った。

高橋さんは大学卒業後、3年ほどの会社勤めを経て、ダニエルの前身で、親類が経営していた「湘南木工」に入社。当時の元町には横浜洋家具を扱った。



▲横浜のシンボルの巨大なイスに立つ高橋社長(横浜市中区)のダニエルで



イスを修理する天野さん

当時元町には横浜洋家具を扱った。高橋さんは大学卒業後、3年ほどの会社勤めを経て、ダニエルの前身で、親類が経営していた「湘南木工」に入社。当時の元町には横浜洋家具を扱った。

こうした中、高橋さんが力を入れたのがブランドの確立だ。1973年には、親しみの持てる社名として、旧約聖書の預言者にちなみ「ダニエル」に変更した。

同じ年、東京の三越日本橋本店で家具販売のイベントがあった。三越の新人社員だった藤田尚志さん(59)は、家具を店に搬入していた高橋さんを今でも覚えている。

他の家具業者はみな前掛け姿だったが、高橋さんはストライプのつなぎを着用し、背中には「Daniel」のロゴ。ダンスやテーブルなど種類ごとの陳列が一般的だったが、テーブルとイス、ソファなどを組み合わせ「シリーズ家具」として売り出した。品質にもこだわり、製品には「Danielle」の焼き印を押し、7年間の品質保証をつけた。

「いろいろな新しいアイデアを持ち込み、黒船来襲のようでした」と当時を振り返る藤田さんは、三越で長年家具を担当し54歳で退職。高橋さんの仕事に打ち込む姿に共鳴してダニエルに再就職し、現在は同社取締役だ。

家具業界は、国内外の大型量販店がブームだが、高橋さんは「家具作りはぶれちゃいけない。信頼してくれるお客さんがいる限り、横浜の誇りを持って伝統を守っていきたくてほしい」と語る。

修理専門の「病院」設立

ダニエルの高橋社長は、家具の修理を専門に行う「家具の病院」を1998年、横浜市西区岡野に設立した。「地球環境保護が求められる時代には、たとえ安いからといって家具を使い捨てるのは間違」との信念からだ。

イスのぐらつきやキズ、破損などの修理を担当するのが家具職人歴60年の天野高光さん(76)だ。持ち込まれる家具の9割以上は他社製品。組み立て方法や部材は、会社によって異なるため、修理法に悩んで眠れないこともあるという。

ただ日頃どう使っているかは一目瞭然という。「大切に使っている人の家具だと、余計一生懸命やっちゃう」と笑った。

天野さんによると、一般的に家具は使い込むほど木材が乾燥し、より強固になる。結合部分にはゆがみが生じるが、修理後には新品より丈夫になるという。「適切に修理すれば何十年も使える。捨てる前にもう一度考えてほしい」と訴える。